The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	詩集『あふれ出る思い』が伝えるセネガル農村女性の声 ：「私の」思いと「私たちの」の価値
Author(s)	砂野, 幸稔
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2017, 28, p. 21-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66373
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『スワヒリ＆アフリカ研究』28 号（2017）21-40
大阪大学大学院言語文化研究科スワヒリ語研究室発行

詩集『あふれ出る思い』が伝えるセネガル農村女性の声

― 「私」の思いと「私たち」の価値 ―

砂野　幸稔

0. はじめに

『あふれ出る思い—農村の女性たちの詩(*Xol yu fees- Taalifi jigeeni kaw gi*)』[1] は、識字・総合開発 NGO である TOSTAN（ウォロフ語で「孵化」を意味する）が編集し、1995 年に出版したウォロフ語の詩集である。

TOSTAN は 1991 年にセネガルで活動を開始し、現在は西アフリカ 6 カ国の 400 以上のコミュニティで活動する総合開発 NGO である。代表はモリ・メルチングというアメリカ人女性であり、現在はアメリカ合州国に本部をおいているが、もともとはセネガル中部の都市チエスを拠点にしており、その成り立ちは多くの落下傘型国際 NGO とは少し異なっている。介入する村落やテーマに資金や人をつぎ込み、「自立支援」を語りながら、実際にはしばしば依存と断片化をもたらす落下傘型介入の問題は、セネガル各地を回る中で強く感じたことだが、少なくとも 1990 年代に筆者が見た TOSTAN は、外部からの介入というよりは地域から生まれた活動という印象を与えるものだった[2]。

この詩集に収められている 30 編の詩は、TOSTAN がチエス近郊の農村で組織した識字教室でウォロフ語の読み書きを覚え、さまざまな活動に参加するようになった女性たちが書いた詩である。

産婆役を務めたのは詩人でミュージシャンのチェールノ＝セイドゥ・サルだった。「放浪詩人」を自称するサルは、1980 年代から二人のミュージシャンからなる楽団 PENC

---

[1] PENC-TOSTAN, 1995. 表題”Xol yu fees”を直訳すると「一杯になっている心」といった意味になる。紙数の都合で本稿ではウォロフ語の原詩は掲載していないが、末尾の文献目録で示すように ALMA project の website にこの詩集が PDF で掲載されているので参照されたい。なお、訳詞中のイタリック、太字などの強調は原詩の強調をそのまま踏襲したものである。

[2] モリ・メルチングは、1970 年代に、アメリカ合州国ではまだほとんど知られていなかったフランス語圏のアフリカ文学の研究のためにダカール大学に留学し、そこでシェク・アンタ・ジョップに出会い、アフリカ諸言語による文化の復権と、アフリカ諸言語の公用語化の主張に接してウォロフ語文化を学びはじめた。その後、セネガル人の協力者とともに村々をまわりながらウォロフ語の口承文化を収集し、そうして出来たつながりから識字・開発 NGO としての TOSTAN を立ち上げた。TOSTAN ホームページ参照。

（ウォロフ語で村の集まりが行われる広場を意味する）とともにセネガル各地の村々を回り、詩を通した意識化の活動を行っており、1990 年(?)には自作の詩集 *Kër dof*(ウォロフ語で「狂人の家」)を出版していた[3]。*Kër dof* に収められている詩は、それまで誰もが知りながら表だっては語られることのなかったセネガル「伝統」社会の負の側面を暴き出す、サルが「挑発詩」と呼ぶものである。娘の教育を否認し結婚を強要する親、妻を鞭で打ち殺した夫、蓄財と女色を求めるマラブー（イスラーム導師）、何人もの妻を娶り多くの子を産ませながら妻子を顧みない夫、等々が、容赦なく風刺と批判の対象になっている。

サルは TOSTAN の求めに応じて、TOSTAN が組織する識字クラスを訪ね、自作の詩を朗読してそれについての議論を促し、詩作のワークショップを行ったのだという。サルを招いた TOSTAN の創設者で、1993 年に自ら *Kër dof* のウォロフ語・英語対訳版[4] を出版したモリー・メルチングは、あるワークショップの様子を次のように伝えている。「彼が詩を読み終わると、女性たちは立ち上がり、腕を振り上げて歓声をあげた。一人の女性が私に言った。『わかる？このことについて本当のことをあえて口にする人なんて見たことはなかったのよ。私たち女が何か言えば私たちの夫は不機嫌になるだろうし、私たちは離婚されてしまうかもしれないのよ』」[5]。こうした朗読の後、サルは自らの詩で取り上げたテーマについてどう思うか、女性たちに自らの考えを言うように促したのだという[6]。詩はそうした議論の中から生まれた。

セネガル女性の置かれた状況を文学作品を通して表象してきたのは、まずセンベーヌ・ウスマンやセイドゥ・バディアン、セク・アリウ・ンダウらの男性作家たちだった。しかし、彼らの眼差しがいかに共感に満ちたものであったとしても、彼らは代弁者にすぎず、彼らの眼差しからは無数の現実が滑り落ち、また彼らによる表象には彼らの眼差しがあたえるゆがみが必然的にあっただろう。セネガル女性が自らの手で、セネガル女

---

[3] Sall, 1990. 詩集そのものには出版年が記載されていないため、正確な出版年はわからないが、”World Cat (http://www.worldcat.org/title/ker-dof-the-mad-house/oclc/29203489/editions?referer=di&editionsView=true)”の書誌では、掲載されている四つの版のうち三つが 1990 年刊となっている（一つは 2004 年刊の再版）。ただし、モリ・メルチングの出版した対訳版はサル自身が描いた挿絵のサインから 1993 年刊ということがわかっているが、”World Cat”ではそれも 1990 年刊となっている。

[4] Sall, Melching,1993.

[5] ibid, p.3.

[6] Guttman,1995, p.39.

性の直面する多くの問題のなかでも代表的な問題のひとつである一夫多妻の問題を取り上げたのがマリアマ・バーの『かくも長き手紙』[7]だったが、フランス語で書かれたこの小説が語っていたのは、高い教育を受けた都市の女性の物語だった。フランス語で書かれた小説の中では、農村の女性たちは男性作家や高等教育を受けた都市の女性作家によって想像され、表象された存在にとどまっていた。

チェールノ＝セイドゥ・サルも男性であり、タブーとされてきたセネガル社会の負の側面を暴き出す彼の詩も、女性についてはあくまでも他者による表象にとどまっていたかもしれない。ただ、大きな違いは、彼が女性たちの前で、これまで表だっては語られることのなかった、女性の側から見た社会の問題を公然と語ることによって、女性たちが自ら語るきっかけを作った、ということである。そして興味深いことは、この詩集には編者であるはずのサルの編集意図がほとんど感じられないことである。次節に掲載された 30 編の詩のタイトルと概要を示すが、それを見ると、詩集に掲載された詩は、何らかの価値基準に基づいて「選ばれた」というよりも、彼のパフォーマンスに反応して書かれた詩を、何の手も加えずに、ただそのまま並べただけのようにも思えるのである。

しかし、むしろそのことがこの詩集をより興味深いものとしている。タイトルと表紙が抱かせる印象とは異なった側面も読み取ることができるのである。

以下、セネガルの農村女性たちの生活世界と彼女らの意識について、この詩集からどのようなことが読み取れるのか、考えてみたい。原詩を断片化して切り取るのではなく、できるだけそれぞれの詩が伝える内容をそのままの形で紹介しながら議論を進めていきたい。

1. 30 編の詩の概要

覚えたばかりの文字を使って積年の思いを書き付けた詩は、なかにはテーマが明確で構成もしっかりし、リフレインや脚韻などの文彩を巧みに用いているものもあるが、一つのことを語り始めながら、ことばをついでゆくうちに主題がずれてゆき、語りはじめと語り終わりが必ずしも整合的につながっていないものもある。自分の思いを、コンテキストを示さずに抽象的なことばでくくってしまったために、コンテキストを知らない読み手には理解が困難なものもある。それゆえ、それぞれの詩の概要といっても、すっ

[7] Ba, 1979.

きり要約できるものではなく、詩で語られていることがおおむねどのようなことと関わりがあるか、という程度のものにすぎないが、おおまかにまとめると次のようになる。無記名のものも多いが、作者名自体が一つのメッセージになっているものもあるので、作者名もあげる。

	タイトル訳	作者名	概要
1	悪い男の家のアーウォ	ソフナ・ンギラーン	夫が若い第二夫人を娶り、顧みられなくなったアーウォ（第一夫人）の嘆き
2	ヤルルワーン（行儀見習い）	ウンミ・ハイリ・ンジャーイ	親族に「行儀見習い」として預けられ、事実上召使いとして使われていた少女の嘆き
3	いまどきのお偉いさん	私たち田舎の百姓たち	国際ＮＧＯなどによる農村開発への援助に介入して私腹を肥やし、人々を分断する役人や有力者への批判
4	ああ、この疲労	「誇りをともに持つ学校」の女の子たち	少女の家事労働のつらさ
5	ヤハ･マ･ジャムの人々をたたえる	ハディ・ジョープ	漁村のたくましく働く女性グループへの称賛
6	敬意がない	無記名	妻の親の支援を受けて商売をしながら、家族を顧みず、結局は失敗した夫を非難し、離婚を求める
7	慈悲深い	セイナブ・ジャーニュ	自分を離縁した夫に自身の非道な行いを語らせ、「俺は慈悲深い」と言わせる
8	なんてことだろう いまどきの子どもたちは	ソフナ・ンギラーン（1の作者）	町で身を持ち崩した息子への嘆き
9	女たちの疲労	アイダ・ンジャーイ	農村女性の労働の過酷さ
10	病弱	アスタ・ンジャーイ	農村女性の病気のつらさ、孤立
11	いまどきの親戚	無記名	親戚への不満。
12	百姓たちはくたびれ果てている	ソフナ・ファール	干ばつと種の高騰によるいきづまりを訴える

13	誰も頼れる人がいない	無記名	働きづめでいながら夫から顧みられない妻
14	この時代	ソーダ・ファイ	この世のはかなさ、欲望を慎むこと
15	結婚とはとてもつらいもの	ファートゥマ・サール	姑と小姑にいじめられる嫁
16	希望を打ち砕く人	セイナブ・ジャーニュ	自分を捨てた男に自らの道徳的優位を示そうとする？
17	私たちは困っている	無記名	男たち、若者たちの無為への嘆き
18	ああ、アーウォなんて！	ファトゥマ・サール	第二夫人を娶った夫の身勝手への嘆き、子どもへの期待
19	結婚	マレーム・ファール	結婚への心構え、妻の誇り
20	私たちはアーウォ、私たちのことばを聞きなさい、私たちはあなたたちに話している	無記名	家を支える第一夫人としての誇り
21	汗は失われない	ファトゥマタ・ンジャーイ	農業への誇り、女性の労働への誇り
22	ありがとう女たち	アストゥ・ンジャーイ	働き子育てをする農村女性の誇り
23	私の結婚生活！	クンバ・ジュフ	妻を養わず他の女に走った夫への抗議
24	なんて時代かしら！	無記名	病弱のつらさと寂しさ
25	私は疲れた	無記名	子どもたちを養う母の苦労
26	苦しみと恥辱	ンデイ・ペンダ・レイ	父から否認された娘の嘆き
27	ああ、私と外国	無記名	夫が外国に出稼ぎに行き、残された妻の嘆き
28	この世では苦しみは続く	無記名	母親に夫と別れさせられ望まぬ結婚をして離婚した不幸を母に抗議する
29	なんてことだろう	アワ・セーン	識字クラスの教師への不満
30	私たちの敵	無記名	村を分裂させる指導者

2.『あふれ出る思い』が伝える農村女性の生活世界

チェールノ=セイドゥ・サルは序言で次のように述べている。「心の詩、魂の詩、苦しみの詩、疲労の詩、忍耐の詩、愛の詩、結婚の詩。これらの詩は、女たちがため込んできたものや女たちの願いを包み込み、女たちの集いの場となっている」[8]。実際、多くの詩が、これまで表だっては語られることのなかった結婚生活の苦しみ、過酷な労働、生活のつらさをうたっている。サルによる「挑発詩」の朗読と討論を通じて、女性たちは、ウォロフ社会で女性の美徳とされてきた忍耐（muñ）と慎み（kersa）の軛から自らを解き放ったのだ。

30 編の詩の中には、そうしたものの他に、農村女性の誇りと批判意識を感じさせるものも見うけられ、また、彼女たちが内面化している旧来の価値意識を垣間見せるものもあるが、それについては後で見ることとし、まず、サルの言う「心の詩、魂の詩、苦しみの詩、疲労の詩、忍耐の詩、愛の詩、結婚の詩」が伝えるセネガル農村女性たちの生活世界を見ていこう。初めて自ら語る「思い」である。際立つのは、農村女性の労働の過酷さ、そして結婚生活の中での女性の孤立無援の状況である。

2.1　少女時代

農村女性は少女時代から家事労働を担う。一人の少女が次のような詩を書いている。

4.　ああ、この疲労　　**「誇りをともに持つ学校」の女の子たち**

私は女の子です。／私のお母さんの一人っ子です。
私が洗濯をし、／私が薪を集め、／私が料理をします。
水くみも、掃除も、私がしなければなりません。
私が、家と家のまわりをきれいにします。
もし私が女の子でなければ、／そんなこと何もしなくていいのに。
くたくたになるまで働いて、横になると　／私は世の中のことを考え、考え、考え続けます。
そして私の心は涸れ、そして私は泣きます。
だって、わからないから、／いつこの疲労が終わるのか。

[8] PENC-TOSTAN, 1995, p.3.

語られていることは明確でほとんど説明は必要ないようにも思える。「私のお母さんの一人っ子」というのは、おそらく複数の妻のいる男性の一人の妻の一人娘ということだろう。ただ、この少女は「もし私が女の子でなければ、そんなこと何もしなくていいのに」ということに気づいている。そして、「いつこの疲労が終わるのか」わからず、泣いているとしても、疲れ果てたあとも「世の中のことを考え続け」ている。

興味深いのは、作者名である。詩は一人の女の子のことを「私」として語っているのだが、作者名は「女の子たち」と複数になっており、しかも、恐らく彼女らが通っている識字教室は「誇りをともに持つ学校」と名付けられている。すると、これはただの嘆きの詩ではないということになる。彼女らは識字教室で同じ境遇を確認しあい、それを詩に託すことで、すでに「誇り」に向かって進み始めているのかもしれない。

2.2　労働

成人後、つまり結婚してから、女性の労働はさらに苛酷になる。次の詩では農村女性の典型的な一日が語られる。

9. 女たちの疲労　　アイダ・ンジャーイ

ンデイサーン！（ああ、なんてこと！）／女は疲れ、弱り果てている。
夜明けから水汲みに行き、ヒエを搗き、／朝食を温め、掃除をし、洗い物をし、
また水汲みに行き、家畜を洗い、放牧し、掃除をし、馬を厩に入れる。
ンデイサーン！（ああ、なんてこと！）／女は疲れ、弱り果てている。
午前中は昼まで畑。／家に帰って昼食の支度。／熱いヒエ粥を頭にのせ、
むずかる子供を連れて畑に戻る。／昼食を給仕し、家に戻る。
ああ！焼け付く日差しの下での行き来。
夕食の火をつけ、ヒエを搗き、箕にかけ、しっかり研ぎ、／畑に戻り夕暮れまで耕す。
足取り重く、家路を探す。／夕食を温め、給仕する。／ベッドでぐったりとなる。
ニワトリが鳴く。
ンデイサーン！（ああ、なんてこと！）／女は疲れ、弱り果てている。

セネガルを拠点とする国際 NGO、ENDA Tiers–Monde のあげる数字によれば、セネガルの農村女性は、平均して一日に 13 時間を水汲み、ヒエ搗き、たきぎ集め等に費やし

ているという。さらに、この詩にあるように家畜の世話、畑仕事も加わる。ただ、こうした毎日の労働を、ただ忍耐（muñ）によって無言で堪え忍んできた女性が、それを言語化し、語り、文字を通して他の女性たちと共有することは、少なくとも状況を変革してゆく最初の一歩になるのかもしれない。

2.3　結婚生活 ー 妻の孤立無援

識字教室に通う女性たちの多くが成人女性、つまり既婚女性であることもあり、半数以上の詩は、なんらかの形で農村女性の結婚生活にかかわる内容である。とくに目立つのは、夫への失望と怒りを語る詩である。一見月並みのように見えてしまうほど似通った語りが繰り返されるが、そのことは逆に、農村女性の生きる現実の中で結婚が占める重さを示している。結婚生活の中で女性が孤立無援である様子は、たとえば次の詩で切々と訴えられている。

13. 誰も頼れる人がいない　　**無記名**

お父さんは死んでしまった。／お母さんは年老いて、何も持たず、何もできない。
夫は頼みにならず、／私をかわいそうなどとは思っていない。
私は小さな子供のようなもの、／私は無力で、／*誰も頼れる人がいない。*
夫は私を奴隷だと思っている。／*私には誰も頼れる人がいない。*
私は夫のために朝も働き、／午後も働き、／汗を流しているのに、夫は寝ころんでいる。
私は家の仕事もし、／畑にも行って働いている。
私は家族を養い、／家畜の世話もしているのに、「ありがとう」と言われたことなど一度もない。／*私には誰も頼れる人がいない。*
（中略）
私にはニジャーイもおらず、チャミンニュもいない。／*私には誰も頼れる人がいない。*
（中略）
私が病気になっても、／夫は私を看病してくれない。
私の子供が病気になっても、／夫は看病してくれない。
夫は私を奴隷だと思っている、／そして私をこきつかう。
私は毎日泣き暮らしている。／でも誰も慰めてくれる人はいない。
私には誰も頼れる人がいない。／たぶん神さまだけ。

（中略）
お父さんは死んでしまった。とても悲しい。
お母さんは年老いて、何も持たず、何もできない。／*私には誰も頼れる人がいない。*

アブドゥライ＝バラ・ジョップの『ウォロフ家族』によれば、ウォロフ社会では土地の相続は基本的に父系だが、王権の相続に母系の名残があるように、農民社会でも、母系の社会的な意味は色濃く残っている。母方のオジ（nijaay）は、とくに甥の教育に責任を持ち、甥は母方の叔父に対して労働奉仕の義務を持つ。また姉妹の子である甥、姪に対する庇護者でもあり、経済的な困窮やさまざまな問題に対しての支援を行う。父方の関係が財産と名誉に関するものであるのに対して、母方の関係は愛情と庇護の関係なのだという。また兄弟姉妹間では、年長であっても女性は男兄弟（càmmiñ）に対して敬意と服従の義務を負うが、同時に男性は姉妹に対して庇護の責任を負う。

「ニジャーイもチャミンニュもいない」というのは、実際にそうなのか、それとも象徴的な表現なのかはよくわからない。ただ、夫が妻を単なる労働力とみなし、妻に産ませた子どもにも責任を持たない、ということが、しばしば見られることは、チェールノ＝セイドゥ・サルの *Kër dof* ですでに告発されていたことである。頼れるのは「神さまだけ」という言葉が出てくる。

2.4　一夫多妻

妻の立場は、夫が娶る第二夫人、第三夫人によってさらに寄る辺ないものになる。マリアマ・バーが『かくも長き手紙』で取り上げたこの問題は、この詩集でもあらわれる。

18. ああ、アーウォなんて！　　ファトゥマ・サール

私はこの家のアーウォです。／*私は疲れました。*
アーウォの私がこの家を取り仕切らねばならないのに、／誰も、何につけても、私の言うことはきかないのです。／*私は疲れました。*
私はこの家で過ごしてきました。／そしてここで子どもたちを生みました。
そのうちに時が過ぎ去っていきました。／私の導師であるあなたは、この家にもう一人のひとを連れてきました。妻だというのです。／あなたはその人を私の上に据えました。

あなたは私に言ったのです。俺はこの女を選んだ、／この女のほうがいい、／彼女を追い出そうとするなら、この家をでていけ、と。
私は黙って耐え、／悲しみと向き合っています。／子どもたちがいるからです。ああ、大家族は疲れます。
私が今日出て行ったとしても、／俺はお前にこえなどかけない、とあなたは言う
子どもたちの面倒を見るのは、／マッチ一本あれば足りる、と言うのです。
私は黙って耐え、／悲しみと向き合っています。子どもたちがいるからです。
ああ、アーウォなんて！／私はこの家のアーウォです。／私は疲れました。
ああ、子どもたちよ、／この家の中での私の苦労を忘れないで。／大きくなったら私の涙を癒しておくれ。／私は私の苦労を忘れますから、／この家の中での。

アーウォとはウォロフ語で一夫多妻の家庭の第一夫人を指す。二番目、三番目の妻を娶る夫の身勝手と、その夫に対する失望、悲しみ、怒り、諦めなどのさまざまな思いは、マリアマ・バーの『かくも長き手紙』やセンベーヌ・ウスマンの『ハラ』などのフランス語作品にも表れるテーマである。「子どものために」という思いが、夫の理不尽な仕打ちに耐える大きな理由になっているのは、一夫多妻の結婚に限らず、男尊女卑社会に共通することかもしれない。

2.5　期待を裏切る子ども

しかし、その子どもたちが女性の期待通りに成長してくれるとは限らない。むしろ、セネガルのような状況では、期待が裏切られることの方が多いかもしれない。

8. なんてことだろう　いまどきの子どもたちは　　ソフナ・ンギラーン

９ヶ月の間お腹に宿し、／その日がやってきた　／難産だった。
二年の間、世話をして、／二年の間、あやした。
お前はひもじい思いをしたことなどないし、のどが渇いたこともない、／汚いままでいたこともないし、着るものがなかったこともない。
そしてお前の手をひいてやった、お父さんのサンダルが　／履けるようになるまで。
私は自分の願いを　／我が子に託した。／息子は私の願いを粉々にした。
息子は酒浸りだという、／麻薬をやり、／シンナーを吸っているという。

おかげで私は皆の非難の的だ。／お前は私の願いを粉々にした。
なにしろ息子がろくでなしだと、／みな母親のせいだと言うのだから。
母親は悪くない。／酒飲みなんかにしてしまうほど。
母親は悪くない。／シンナーを吸う人間にしてしまうほど。
ああ私は苦しみの海の底。／なんてことだろう　いまどきの子どもたちは！

この詩の作者ソフナ・ンギラーンは、二つの詩を寄せている。もうひとつの詩「１．悪い男の家のアーウォ」では、夫が第二夫人を娶り、自分が顧みられなくなったことを嘆いている。その上、苦労して育て、期待をかけていた息子は、町に出て身を持ち崩してしまった。彼女の嘆きはたくさんの農村の女性の嘆きなのだろう。

若者たちは貧しい農村から大都市に出ていく。「出稼ぎ」という言葉はあまり正確ではない。とくに仕事の当てもなく、親戚や村の知人のつてをたどってともかく町に出て、チャンスを探すのだ。しかし、ほとんどの場合、かろうじて生き延びることのできる日銭を稼ぐことしかできず、閉塞感の中で都市の闇に飲み込まれていく若者も少なくないのだろう。

セネガル政府の統計による失業率は全国平均約 25%、都市部 17%、農村部 33%となっている。しかしこれは、あくまで役所の把握する数字にすぎず、「就業者」に分類されている人々も、大部分がいわゆるインフォーマルセクターでわずかな日銭を稼ぎ、あるいは親族や同郷人に寄生してかろうじて暮らしている人々である。ほとんどのひとはそれでも敬虔なイスラーム信者として、互いに助け合いながらまっとうな生き方をしようとしているが、道を踏み外す者も少なくない。

さらに、外国に行って現在の窮状を脱しようとする人々も少なくない。「27．ああ、私と外国」の作者が嘆くのは、夫が自分と子どもをおいて「外国に行く」と言って去ったまま消息を絶ってしまい、生活が行き詰まってしまったことだ。

2.6　農村の疲弊

多くが「私」のつらさを語るなかで、「私たち」が語られることがある。次の詩では、同じように「嘆き節」を奏でているように見えても、視線が社会に向けられていることが感じられる。

12. 百姓たちはくたびれ果てている　　ソフナ・ファール

百姓たちはくたびれ果てている
野には薪もなく　／草もなく　／家畜は死んでいく
私たちには水もない　／水道というもののことを聞くけれど　／私たちの井戸はすっかり干上がっている ／私たちは洗濯でくたくただ　／*百姓たちは本当にみじめだ*
（中略）
雨期がちゃんと来ても、私たちは右往左往するだけだ　／落花生も、トウジンビエも、豆も、トウモロコシも、／私たちには蒔く種がないから。何もかも高すぎるのだ。
乾期の畑作りの話を聞くけれど　／私たちには灌漑用水なぞありはしない
井戸掘りのことなんて私たちにはわからない
そういう話を聞くけれど　／野菜がどこなら育つか、私たちにはわからない
男たちはすることもなくぶらぶらし　／そして町に出て行く
でも結局町は男たちを送り返してくる　／彼らにできることなど何もないからだ
私たちは疲れ果て、もうどうしていいのかわからない
ああ！　／*百姓たちはくたびれ果てている！*

すでに見たように農村の主要な労働の担い手は女性である。女たちの一日は、朝の水汲みに始まり、炊事や洗濯、畑の水遣りなどで終わる。干ばつはこれらすべての労働を苛酷で困難なものにする。男たちは町に仕事を求めて出て行くが、満足な収入を得られることは少なく、村と町の往還を繰り返すことになる。

この詩が書かれた1990 年代の半ばは、相次ぐ干ばつと政府の開発政策の失敗（放棄）によって、農村部の疲弊がとくに際だっていた時代である（いまも改善されたとは言えないが）。畑に蒔くための種の値段は手が届かないほど高く、「乾期の畑作り」や「灌漑用水」などについて耳にしても、それが自分たちと無縁のものであること、男たちが「町に出て」行っても、「できることなど何もない」ことを、作者はある種冷静な目で見ている。「百姓たちはくたびれ果てている」ということばは、もはや個人的な嘆きではなく、一つの訴えであり、それは、そうした状況を作り出した人々への批判ともなっている。

3. 農村女性の価値意識 — 個の「思い」ではなく、「私たち」の価値

忍耐（muñ）と慎み（kersa）によって抑え込まれ、語られることなく生きられていた農村女性たちの日々の現実が、詩という形で言語化され、こうした「表現」を通じてつながっていくことは、たしかに自分たちの日常の現実を相対化するきっかけとなるものだろう。実際、上で見たように「12. 百姓たちはくたびれ果てている」は、すでに一つの批判になっていた。

しかし、パウロ・フレイレの語る「意識化」が、何回かの詩のワークショップによって一気に成し遂げられるわけではない。自分が置かれた状況を見つめることは、その第一歩であり、この詩集はたしかにその第一歩にあたると言えるだろう。だが、女性たちのなかにある「正しさ」、「よい生き方」についての価値意識は、しばしば、「伝統的」な価値意識である。彼女たちは自らが置かれた状況についても、まずそれを通して見ているのだ。

実際、この詩集には「いまどきの（tey＝今日（きょう／こんにち））」という表現がよくでてくる。タイトルだけでも「3. いまどきのお偉いさん」、「8. なんてことだろう、いまどきの子どもたちは」、「11. いまどきの親戚」と三つあり、「15. 結婚とはとてもつらいもの」では「いまどきの姑たち」が批判される。

おそらく「（誰もが理想通りのあり方をしていたはずの）昔はこんなひどいことはなかったはず」という気持ちが強いのだろう。いま自分が生きている状況を相対化し、批判できるためには、「ここではない別の場所では違うあり方がある」という知識を持つ必要があるが、農村女性が外のまったく異なった世界を比較の対象にすることは簡単ではない。ほとんどの場合、手がかりとして使えるのは、教えられてきた世界観のなかで「あるべきあり方」があったはずの「昔」なのではないだろうか。

そして、その「あるべきあり方」の土台をなすのは、価値意識の根底にある「神」への帰依である。しばしば農村部の就学率の低さが語られるが、フランス語教育を行う小学校がないところでもコーラン学校は必ずあり、基礎的イスラーム教育を行うコーラン学校の「就学率」はほぼ100％である[9]。「2. ヤルルワーン」では、自分の子どもが「ヤルルワーンなどされないように」「神」に祈り、「10. 病弱」では、絶望の果てに「神」への感謝

[9] 政府統計ではコーラン学校は「就学」とはみなされないため、就学率の統計には含まれないが、実態としてはイスラーム教徒の子どもはほぼ全員が通う。

がよりどころになる。他方、「6. 敬意がない」では、自分に非道な行いをした夫に「神」が「思い知らせて」くれ、「11. いまどきの親戚」では、けしからぬ親戚が「神」の意にかなわぬものとして批判される。生きる最後のよりどころが「神」であり、また、批判する相手に対する道徳的優位を担保するのも「神」への帰依である。そしてこの「神」への帰依は、往々にして前の世代から引き継がれてきた「伝統的」な価値意識を下支えするものともなっている。

たとえば夫を批判する「18. ああ、アーウォなんて」では、夫を「私の導師であるあなた」と言っている。「導師（seriñ）」とは、学識のあるイスラーム導師を指す言葉だが、「伝統的」な考え方では宗教生活においても夫は妻を導くべきものとされているのである。「伝統的」価値意識では、夫は複数の妻を娶ることができるのでそのこと自体を非難することは難しい。非難されているのは、複数の妻を娶った場合も、すべての妻に対して公平であるべき夫が、新しい妻を「私の上に据えた」ことなのである。

そして、「よい生き方」について、「伝統的な」価値意識を、非常に明確に語っているのが、たとえば「19. 結婚」である。

19. 結婚　　マレーム・ファール

ジョンガマよ[10]、／私が言うことを聞いておくれ　／結婚について私が知っていることを！
結婚とはつらい務めです　／長く、厳しい務めです。
でもそれを耐え忍べば　／*苦しみは過ぎ、去っていきます。*
（中略）
結婚の喜びは、年々から水を汲み、月々を耕すことにあります、
その時、その時があるだけ。あなたはそれに向き合うのです。
ときどき、呆然とするほどの厳しいつらさを味わうこともあります。
でも振り返ってはなりません。子どもたちのことだけを見つめ、
そのすばらしさを感じなさい。投げ出してはなりません。

10 「ジョンガマ(jongama)」とは、美しく優雅で洗練された女性を指す言葉で、かつては通常高貴な女性に用いられたが、いまでは大人の女性に対しての敬意を払った呼びかけの言葉となっている。

それを耐え忍べば　／苦しみは過ぎ、去っていきます。

ジョンガマよ、／結婚の部屋に入ったなら[11]、

苦しみの海にひたり、溺れ、その水を飲みなさい

わかるまで。気持ちを強く持ち、正直であり、耐え忍びなさい。

苦しみは過ぎ、去っていきます。

ジョンガマたちよ、／私たちの先人たちに倣いなさい

ジャーラ・ブソとヤーシン・ブーブ[12]は／耐える人であり、賢明な人でした。

苦しみは過ぎ、去っていきます。

彼女たちは幸せの海に浸り、／その幸せはこの世の中にたっぷり注いでいるのです。

この詩は、忍耐（muñ）と慎み（kersa）という「伝統的な」生き方、価値観をむしろ誇らかに肯定している詩で、これまで紹介した「嘆き節」に反論しようといているかのような印象を受ける。まるで女大学のように忍耐を説き、その末の幸せを説いているのである。「ジョンガマよ」という呼びかけのことばから受ける印象は、既婚女性に対してより年長の女性が呼びかけ、諭しているというものである。おそらく識字教室で、自分より年若い女性たちが不満ややるせなさばかりを書いているのを見て、「正しい」生き方を諭そうとしたのではないだろうか。この詩は、多くの女性たち、妻たちが、とくに農村で、これまで見てきたような人生を受け入れて生きてきた背景をかいま見させてくれる。女性の「正しい生き方」のモデルがあり、自分が置かれている社会と与えられた自分の人生を肯定し、そこに喜びと誇りを見出して、次の世代の女性にも同じ価値観を引

---

11 「結婚の部屋に入ったなら」:「嫁いだら」ということ。

12 19 世紀の半ばに生きたジャーラ・ブソは、本名ソフナ・マリヤーム・ブソ、ジャーラトゥル・ラーハ（アッラーの隣人）、あるいはマーム・ジャーラとも呼ばれ、セネガルのムリッド教団の創設者であるアマドゥ・バンバの母。ムリッド教団の信者、とくに女性信者にとっては崇敬と信仰の対象となっている。高名なイスラーム導師の娘として生まれた彼女は若い頃から抜きんでたイスラームの学識で知られ、やはりイスラーム導師であった夫と伯父に献身的に仕え、聖者アマドゥ・バンバを生み育てた非の打ち所がない女性であったと言われる。

ヤーシン・ブーブは、17 世紀末の人で、ウォロフ人の王国のひとつカヨール王国の伝説的なリンゲール（王母）で、夫への献身と自己犠牲の模範として、誰もが知る伝説の主人公。伝説によれば、彼女の夫で後のカヨール王国第七代ダメル（王）となるマジョール・ファティム・ゴレーニュは、王位継承権を得るために、妻たちに犠牲として命を捧げることを求め、他の妻たちが拒む中で、彼女一人が、生まれたばかりの赤ん坊に最後の乳を与えたあと、夫にのどをかききられることを受け入れた、と言われている。マジョールは、彼女の犠牲のおかげで王となり、さらに彼女が最後の乳を与えた赤ん坊は次の王ビラム・ヤーシン・ブーブとなった、とされる。

き継いでいくということは、こうした自分自身を説得し、まわりを説得する言葉によって支えられているのだろう。

4. 農村の誇り、都市への不信

4.1 労働への誇り

また、労働についても、つらさを訴える嘆きの詩だけではない。労働の誇りをうたう詩もいくつか見られる。「5. ヤハ・マ・ジャムの人々をたたえる」は、漁村の女たちのたくましさへの称賛であり、「21. 汗は失われない」が語るのは、農業への誇り、女性の労働への誇りである。しかし、そこに感じられるのは、都市への不信の裏返しとしての農民や漁民の生き方への誇り、つまり「彼ら」の価値に対して「われわれ」の価値を対置するような意識のあり方である。たとえば、次の詩が語るのは働き子育てをする農村女性の誇りだが、その誇りは、依存的な町の女たちへの侮蔑と対になっているようにも感じられる。

22. ありがとう女たち　　アストゥ・ンジャーイ

私はあなたたちを見た　／あなたたちは夜明けから大カゴを頭にのせ　／出かけてゆく。
でも私もまた　／たらいを頭にのせ　／井戸に向かい　／水を汲み、頭にのせ、
水瓶をいっぱいにし　／朝のうちにあなたたちに追いついた。
私たちセネガルの女たちは　／本当に身を粉にしている！
汗は自分のためになる、身を粉にし、慎ましく　／よい人たちに倣い　／よい性格を保てば　／私たちの始まりはよく　／終わりもよいだろう
（中略）
この国の人たちの性格を　／見分けよう　／よい性格と　／悪い性格がある。
体を洗ってきれいになり、／オフィス街に行ってほっつき回り　／あれこれねだり
／人から何かもらおうとする、それは醜い。
夜明けに目覚めて仕事をする、／売りに行く、／家族を食べさせる、その方がよい。
子どもはあなたを見ている　／あなたが身を粉にし、慎ましく生きていれば
大きくなってもそういう生き方をするだろう。
（後略）

「体を洗ってきれいになり、／オフィス街に行ってほっつき回り ／あれこれねだり／　人から何かもらおうとする」というのは、この詩の作者から見た町の女たちのイメージなのだろう。そうした「醜い」生き方、「悪い性格」に対置されるのが、「夜明けに目覚めて仕事を」し、「身を粉にして」働く農村の女性たちであり、ある意味で非常にわかりやすい「農村／都市」の二項対立図式がそこからは見て取れる。

4.2 「外部」への不信

都市、あるいは「外部」に対する不信がもっとも明確に表れているのが、たとえば自分たちのところに入り込んできた「外部」からの介入者に対する厳しいまなざしを示す「3. いまどきのお偉いさん」である。

3. いまどきのお偉いさん　　私たち田舎の百姓たち

まったく、私には、いまどきのお偉いさんたちがさっぱりわからない。
こんなお偉いさんが、私たちのなかに入り込んできた　／私たちのところへ送り込まれたのだ　／***私たち、田舎の百姓たちのところへ***
その人が私たちと一緒に働くようにと　／***私たち、田舎の百姓たちと一緒に***
その人は私たちを目覚めさせ、導かねばならない　／***私たち、田舎の百姓たちを***
その人は私たちを縫い合わせる針とならなければならない　／***私たち、田舎の百姓たちを。***
ところが結局その人は、ナイフとなって私たちを切り離し、私たちをばらばらにしてしまった　／***私たち、田舎の百姓たちを***
まったく、私には、いまどきのお偉いさんたちがさっぱりわからない。
こんなお偉いさんが、私たちのなかに入り込んできた　／***私たち、田舎の百姓たちのところへ***
そして私たちが決して見ることのできないようなものを約束する　／そして私たちを口車に乗せ　／私たちを使ってもうけようとする　／そしていつも私たちは心を眠らされ　／私たちはその人のよい暮らしのために汗を流す　／そしていつも私たちは苦しめられ　／私たちが目覚めることのないように　／目を覆われてしまう。
まったく、私には、いまどきのお偉いさんたちがさっぱりわからない。

（中略）

こんなお偉いさんが、私たちのなかに入り込んできた　／***私たち、田舎の百姓たちのところへ***

援助の人たちが、この国が前に進むようにと　／この国にもたらしてくれたものを

私たちが私たちの分を受け取ると、その人はそれに手を出して、／それを細かく切り分けて、私たちをもっとバラバラにしてしまう

ある者たちは笑い、ある者たちは泣く　／そして私たちはみな、誰も寄る辺のない者になってしまう。

まったく、私には、いまどきのお偉いさんたちがさっぱりわからない。

こんなお偉いさんが、私たちのなかに入り込んできた　／***私たち、田舎の百姓たちのところへ***

援助の人たちが、この国が前に進むようにと　／この国にもたらしてくれたものを

私たちが私たちの分を受け取ると、その人はそれに手を出して、／それを細かく切り分けて、私たちをもっとバラバラにしてしまう

（中略）

この人は、ここの人たちのところに入り込み、みなをだまし、／その人たちがすっからかんになると　／この人は場所を変えて、別の人たちのところに入り込むのだ。

まったく、私には、いまどきのお偉いさんたちがさっぱりわからない。

実に手厳しい。そして生々しい。「私たち田舎の百姓たち」という作者名そのものが、「農村／都市」の二項対立図式を明確な形で表現し、それが、「こんなお偉いさんが、私たちのなかに入り込んできた」という言葉とともにリフレインとして繰り返されるとき、そこにある外部からの介入者に対する強い不信が感じられる。そして、外部からの介入者に対する一歩引いた視線が、農民を利用し、分断し、搾取する構造への並外れて明晰な批判となっている。

「お偉いさん」と訳した “njiit” は「長」「責任者」「指導者」を意味する言葉である。具体的にどういう人を指しているかは明確には分からないが、確実なことは、それが、フランス語を操り、外部からの開発援助の受け入れや、生産物の取引に何らかの形で関与する人物であるということである。村人たちと直接接触する政府の役人かもしれないが、開発援助という形で介入する何らかの地元 NGO の担当者であったりする可能性も

ある。というのも、1980 年代にセネガル政府が世界銀行による構造調整策を受け入れてから、独立以来行われてきた開発公社等による農村開発への政府の直接介入が廃止され、「農民の自主性に任せる」という名目で、政府は農村開発から事実上手を引いているからである。以後、農村開発は国際機関や国際 NGO と、地元で組織される受け入れ側の NGO が主導する形が作られて行った。

政府開発公社時代には、資金と権益を握る役人は地元の有力者と結びつき、「開発」よりも権力を利用して「私服を肥やす」だけの関係がしばしば作られたが、フランス語を操り、「無知な」農民と国際 NGO の間に立つ「地元リーダー」と村の有力者の関係も、それと似たものになってしまうこともあっただろう。農民の無知につけ込んで「有力者」や「お偉いさん」が富と権益を独占しようとする構図はいまも存在している。

「29. なんてことだろう」、「30. 私たちの敵」でも同様に、村人を搾取し分断する外部からの介入者に対する強い不信が示されている。

5. 結論

識字教室から生まれた詩集『あふれ出る思い』は、これまで語られることのなかった農村女性たちの思いを、はじめて彼女ら自身の言葉で伝える詩集として大きな意味を持つ。それゆえ、この詩集の価値は、まず何よりもこれまで声を発することのなかった農村女性たちが、識字とチェールノ＝セイドゥ・サルのワークショップをきっかけとして自ら語ったことにある。

しかし、それ以上に興味深いのは、多くの嘆きが語られる中で、むしろ彼女たちを縛ってきた「伝統的」価値意識が、この詩集のさまざまな場所に読み取れることである。この詩集は、農村女性たちの苦境だけでなく、彼女たちが生きる上でよりどころとする価値の場所もわれわれに伝えてくれる。この詩集からは、解き放たれた「私」の思いと、よりどころとしての「私たち」の価値意識の双方が読み取れるのである。

忍耐（muñ）と慎み（kersa）は、彼女たちを縛り続けてきたものであると同時に、彼女たちが不信の目を向ける都市的価値観への批判のよりどころであり、勤勉と農村の労働の価値への誇りの源でもある。外部からの介入者に対する明晰で鋭い批判は、実はそうした価値意識を土台として可能になっている。

この詩集の魅力と価値は、それがお仕着せの枠組みの中で作られ編集されたものではなく、冒頭でもふれたように、チェールノ＝セイドゥ・サルによる試作ワークショップ

という新鮮な驚きと気づきの場、一種の祝祭的な場から生まれた詩を、作為なく、そのままの形で収録してあることにある。

実は、私の知る限り、その後、新たな『あふれ出る思い』は編まれておらず、この詩集は、少なくともセネガルにおいては孤立した試みにとどまっている。残念なことではあるが、仮に同様の試みが行われたとしても、この詩集におけるような自発性は容易には得られなかったかもしれない。そういう意味でも、この詩集はセネガルの農村女性たちの「思い」に触れる貴重な資料となっていると言えるだろう。

参考文献

Ba, Mariama.1979.*Une si longue lettre*, édition: NEAS. Dakar, Sénégal. （邦訳、『かくも長き手紙』、中島弘二訳、講談社、1981）

Diop, Abdoulaye-Bara.1985. *La famille wolof – tradition et changement*, Karthala, Paris.

Diouf, Jean-Léopold. 2003. *Dictionnaire wolof-français, français-wolof*, Karthala, Paris.

ENDA Tiers–Monde. 2005, *Le visage de la pauvreté énergétique à travers la femme au Sénégal*, ENDA Tiers–Monde, Dakar, Sénégal.

Gouvernement du Sénégal. 2015. *Indicateurs socio-économiques* (http://www.gouv.sn/Indicateurs-socio-economiques.html)

Guttman, Cynthia. 1995. *Breaking Through: TOSTAN's Non-Formal Basic Education Programme in National Languages in Senegal*. Education for All: Making It Work. Innovation Series. UNESCO, Education for All Forum Secretariat.; United Nations Children's Fund, New York

PENC-TOSTAN. 1995, *Xol Yu Fees - Taalifi jigeeni kaw gi*, PENC-OXFAM AMERIG-TOSTAN, Thiès, Sénégal. ※以下の website でフルテクストを参照可能：West African Research Association for the African Language Materials Archive (ALMA) project http://dlir.aiys.org/ALMA/alma_ebooks/wolof_002.pdf

Sall, Thierno Seydou. 1990, *Kër Dof*, self-published, Dakar, Sénégal.

Sall, Thierno Seydou / Melching, Molly. 1993, *Kër Dof (the Mad House)*, Daniel Perrot, Thiès, Sénégal (Bilingual version: english translation by Molly Melching).

TOSTAN ホームページ http://www.tostan.org/about-us/mission-history